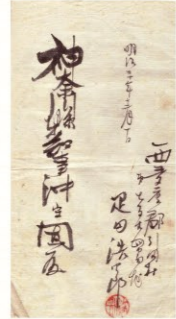


疋田浩四郎 1849 - 1896

【ひきた こうしろう】



疋田浩四郎



小学校教員学力検定願

嘉永2年(1849年)3月、摂津国有馬郡三田屋敷町(現在の兵庫県三田市)の三田藩士、疋田隼之助の四男として生まれる。8歳のころから中国の書物の勉強をし、その後江戸へ出て国学や儒学などを学び、帰郷して

育に情熱を傾け、気さくな性格の浩四郎は子どもたちからも信頼され、村人たちの評判もとても良かった。青年層の教育にも熱心に取り組み、「自分たちの村は自分たちの力で」を信念に戸倉村の政治を変えて村を再建していこうとする。明治25年(1892年)選挙では青年会から大勢の若者が村会議員に当選した。

明治29年(1896年)9月、心臓病のため享年47歳で逝去。浩四郎の死を悲しみ、村の人々は村全体で葬儀を執り行う。浩四郎の死後、戸倉村は優良自治体「模範村 戸倉」と名が知られるようになり、明治43年(1910年)内務大臣から表彰される。浩四郎は、戸倉にある光厳寺に埋葬されており、毎年命日には旧戸倉小学校(平成25年3月31日閉校)の子どもたちがお墓参りをしていた。

(参考文献)「五日市町史」・「郷土に光をかけたひとびと」

からも数学、英学などを学んだ。

明治6年(1873年)教員養成所だった横浜啓行堂に入学して教師の資格をとり、明治7年(1874年)に集開学舎(現在の西秋留小学校)の教師になり、明治17年、戸倉学校(児童数50名余り)の第4代校長兼教員として家族とともに赴任。戸倉村(現在のあきる野市戸倉)は教育熱心な村だったが、お金がなく、小学校の校舎も雨漏りがするほど荒れており、門や玄関もなかった。そのため、浩四郎の給料も十分に支払いができず、浩四郎は教師の仕事のほかに早朝には炭を運び、夜はわらじを作り、妻は針仕事の内職や自分の着物を売って生計をたてた。

苦しい生活にも関わらず、戸倉出身の教員たちとともに子どもたちの教

もっと知りたい
ゆかりの地

光厳寺

MAP C3

臨済宗建長寺派。このあたりの禅宗寺院としては最も古い。本尊の釈迦如来は都指定有形文化財。境内に植えられているヤマザクラは、都の天然記念物。



あきる野市戸倉328番地

坂本龍之輔 1870 - 1942

【さかもと りゅうのすけ】



坂本龍之輔(30歳)

画像提供: 町田市民文学館ことばらんど

明治3年(1870年)7月23日牛沼村(現在のあきる野市牛沼)の江戸時代から続いている八王子千人同心の世話頭格の家の五人兄弟の三男として生まれる。

7歳で共和学校(現在の西秋留小学校)に入学し、6年後中等科を卒業し、高等科で学びながら助教となり小学生の指導にあたり、18歳で神奈川県立の師範学校に合格し、22歳で師範学校を卒業する。西多摩郡古里村の習文小学校(現在の奥多摩町立古里小学校)をはじめ東京市万年尋常小学校(現在の台東区北上野駒形中学校)などいくつかの学校に赴任する。

教育に対する情熱の深さはなみなならぬものがあり、龍之輔は「小学校こそ人間形成の基礎工期なり」を信念に、貧困で学校に行けない児童のため授業料の免除、教科書・教具貸与のほか、基本的生活習慣にいたるまで熱血を注ぎ、赴任先の子どもや保護者、地域の人々に尊敬され、慕われた。

龍之輔は、およそ20年間東京下町で教育実践に尽力したが、大正10

年(1921年)5月心臓病を患って退職。晩年は牛沼に帰り悠々自適の生活を送り昭和17(1942年)年3月26日73歳の生涯を閉じる。

(参考文献)「郷土あれこれ」・「秋川流域人物伝」

もっと知りたい
ゆかりの地

敬慕碑

MAP J3

牛沼にある敬慕碑は、東京市万年尋常小学校を卒業した有志でつくる龍生会のメンバーによって、坂本龍之輔の功績を称え生家跡地の一角に建立された。

また、東京市万年尋常小学校の校庭内には、やはり教え子有志によって「郷土の教育開拓者」と題し坂本龍之輔の銅像が建てられている。

あきる野市牛沼80番地



坂本龍之輔の功績を称えた敬慕碑が生家の一角にある。

三ヶ島葎子 1886 - 1927

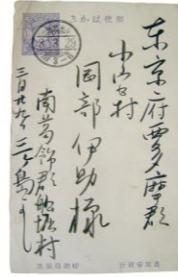
【みかじま よしこ】

1886 - 1927



三ヶ島葎子(24歳)

画像提供: 所沢市教育委員会



直筆はがき

本名: 倉片よし

明治19年(1886年)8月7日埼玉県入間郡三ヶ島村堀之内(現在の所沢市堀之内)に生まれる。

父は小学校の校長先生。母は東京府西多摩郡増戸村(現在のあきる野市伊奈)正一位岩走神社社家宮沢安堯の長女。母は葎子が5歳のとき、病没。その後父は小暮のぶと再婚する。葎子は埼玉県師範学校を病気のため中退したが、宮沢家の世話もあり、明治41年(1908年)6月から大正3年(1914年)3月(21歳から27歳)まで、小宮尋常高等小学校に約6年在職、乙津(落合)の雑貨商の一室を借りて自炊の生活を送る。この時期、与謝野晶子の門下となり、「女子文壇」「スバル」などの雑誌に短歌、散文を発表。大正3年3月結婚を理由に退職。卒業式の後、小宮村から五日市町まで、校長に引率された全校児童に送られて上京。

一時は与謝野晶子の後継者として一目置かれることもあったが、大正5年(1916年)、明星調の作風に疑問を持ち、島木赤彦の門下となる。同年

古泉千樫の「青垣会」結成に参加するが、昭和2年(1927年)3月26日、麻布谷町(現在の六本木)の自宅で逝去。享年40歳。

生前の歌集は、『吾木香』のみだったが、子どもの倉片みなみの努力により「三ヶ島葎子全歌集」「三ヶ島葎子日記」(上下巻)が刊行され、小宮時代も含めその全貌がより明らかになった。

徳雲院にある碑は小宮地区の方々が地域の文化向上などを目的に、三ヶ島葎子を後世に伝えたいという思いから建てられたもので、碑には葎子が詠んだ「筏組む木の音冴えて水ませる あさけのたにに 鶯の鳴く」と刻まれている。

(参考文献)「三ヶ島葎子歌集『吾木香』」・「多摩のあゆみ」

もっと知りたい
ゆかりの地

徳雲院

MAP A3

臨済宗建長寺派。境内にある歌碑は、地元の有志によって建てられたもの。季節になるとウメや桜などの花木が境内を彩る。また、五日市七福神の寿老人が祀られており、見どころの一つとなっている。



あきる野市乙津511番地

丸山惣兵衛 1804 - 1897

【まるやま そうべえ】

1804 - 1897



丸山惣兵衛(定静)

雨間丸山家の系譜

丸山家は戦国時代に甲斐武田家に仕えていたが、天正10年(1582年)武田家滅亡後は徳川家康に仕え、慶長4年(1599年)雨間村(現在のあきる野市雨間)に移住した。慶長5年(1600年)には八王子千人同心千人頭石坂弥次右衛門組の組頭に取り立てられ、その後、子孫は代々八王子千人同心家として代官・領主から帯刀を許され、幕末に至るまで村内では高い地位を占めていた。

「御進発御供中諸事筆記」(第二次長州征伐の従軍記)を残す

9代目丸山惣兵衛(定静)は、文政7年(1824年)父に代わって千人同心組頭役に就任し、長柄訓練や砲術・火術稽古に参加し、弘化3年(1846年)には江戸城の吹上上覧所の前で行われた長柄訓練では、老中より手当銀二枚を賜った。文久3年(1863年)の將軍上洛や翌元治元年の再上洛に供奉し、同年「甲州賊徒追討」にも出張していた。

さらに、慶応元年(1865年)5月から翌2年11月にかけて行われた第二次長州征伐に幕府軍として従軍し、「御進発御供中諸事筆記」(秋川市史料集第4・第7・第9集として刊行)という日記を残している。これは、

遠征に加わった丸山惣兵衛が帰郷後、この長州征伐出陣中の出来事、幕府の通達、道中の様子、戦闘状況などを、自分の属していた砲術方8番小隊の行動を中心に書き綴った日記で、長州征伐の様子が記された貴重な資料となっている。

また、丸山惣兵衛は八王子千人同心解体後、明治新政府から甲州府兵の護境隊頭取に任命され、隊長につぐ重要なポストに就任している。この護境隊は八王子に常駐し、徳川家支配から明治新政府へと支配が移行する無政府的状況の混乱期に、多摩地域の治安維持に重要な役割を果たした。

(参考文献)「秋川市史」・「多摩のあゆみ」・「丸山雄重家文書目録」

もっと知りたい
ゆかりの地

丸山家長屋門

MAP J3

丸山惣兵衛の生家には江戸時代に造られた丸山家長屋門がある。丸山家は江戸時代の初めの頃から雨間村(現在のあきる野市雨間)の名主を勤めてきた。また、代々八王子千人同心の組頭を勤め、そのような格式の表れとして長屋門が造られている。江戸時代にこのような門を造れる家はごく限られていた。



丸山惣兵衛の生家にある江戸時代に造られた長屋門

あきる野市雨間